
隣町で勇者してます。

二月十日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣町で勇者してます。

【Nコード】

N7154T

【作者名】

二月十日

【あらすじ】

勇者を必要とするのは一体どういう存在だ？

魔王の驚異に怯える異世界の国？ それならきつと、美らかな巫女さんだかが魔法でも使って呼び出してくれるんだろうな。

実を言うと僕も勇者なんだ。ただ僕を必要としたのは異世界ではなく隣の町で、召喚方法は魔法ではなく軽トラで誘拐されてなんだけど。

だけど多分、僕にはむり。（前書き）

初投稿です。 長らく読むだけだったのですが、一念発起し自ら執筆すること致しました。毎日投稿する予定ではありますが、何処までやれるかは不明です。 一週間音沙汰がなければ恐らく二月十日は死んでます。

だけど多分、僕にはむり。

確かに退屈はしていたと思う。

高校生になっても僕の人生は平凡で、でもそれが誰のせいでもない、つてことが分かるくらいには中学生の頃から僕も成長していた。だから退屈でも、その日常を受け入れて生きていくしかないのだと、諦めにも似た感情を抱きつつあった高校二年生のある日。

僕は突然、勇者として召喚された。

それは魔法ではなく軽トラを用いられ、

召喚先は異世界ではなく僕の住む街の隣町だった。

余りに突然の出来事に、僕が最初に思ったのは「ああこれじゃバイトに行けない」、という端からみれば酷く危機感に欠けるマヌケな考えだった。

背中にガタガタと砂利道を車で走ったとき特有の振動が伝わってくる。一体何処に連れて行かれるのかと考えると嫌な想像ばかりが頭に浮かぶ。

正直高校生にもなつて誘拐されるとは思ひもしなかった。まさに一瞬の出来事。学校からの帰り道、だらだらと歩いていた僕の前一台の白い軽トラが路上駐車したかと思えばその荷台から何人かの男達が下りてきてあつという間に僕を担ぎ上げた。そのまま荷台へと乗せられた僕はドナドナと連れ去られる事と相成った。ドツキりであるならばネタばらしを、夢であるならば爽やかな目覚めを望む。

日常とは退屈だ。だが今は、正直そんなこと言ってられやしない。

誰か助けて。神でも軍人でも、サラリーマンでもいいから。

だけど多分、僕にはむり。（後書き）

僕は小説を読む途中に区切りがあるのは好まないで、後書きは基
本書きません。同じ理由で前書きも。次に書くのは主人公がちゃ
んと勇者になってくれた後くらいになりますかね。

勇者とはなんぞや

体感時間にして一時間ほど経った頃、今僕がおかれている状況の不自然さについて「あれ？」と思う。

この一時間、脳内でこれからの展開について考え震えたり青くなったり忙しかった僕なのだが、しかしそのおかげか冷静になれたようだ。

取り合えず不審点その一。

僕は今軽トラの荷台に横になっている。しかし僕の体は全く拘束されていない。手を縄で縛られることもなく、口に猿轡をされている訳でもない。これなら普通に起き上がれるし、逃げようとすれば逃げられない事もない。荷台から飛び降りれば良いのだから難しい事ではないはずだ。尤も今走っている道が山道で、飛び降りれば怪我は免れず誘拐犯達が追い掛けて来るだろう事を考えれば余り現実的ではないのだが。

次に 不審点その二。

その誘拐犯達なのだが明らかに風体がおかしい。今荷台に居る二人と、そして僕を担ぎ込んだ後助手席に移ったもう一人、その三人共がコスプレとしか言えないものを着ているのだ。

僕とて一介の高校生だ。人並みには漫画やゲームといった創作物の類に触れる機会もあった。彼等が身に纏っているのは正にその中に存在する騎士やら僧侶やらの格好なのだ。

あるいは誘拐という行動に於ける力モフラージユの一つなのかとも思ったが、何と云えばいいのか彼等の格好は妙に板についていてもそうは思えないのだ。コスプレイヤーな誘拐犯。少しばかり理解に苦しむ。そして不審点その三。

この車、どうやら街中に向かっていているようである。僕が住む白夜町は四方を曉、朝日、夕闇、宵闇という四つの町に囲まれているのだがこの軽トラは町ざかいにある山を経由して朝日町へと向かって

いるようだ。そのくせ彼等は車を乗り換えるなり、僕を見えないようにするなりをしようとはしない。これでは街中に入った時点で僕が大声で助けでも求めれば彼等はそれで御用である。

ていうかそもそも、軽トラの荷台に三人も乗っている事から法律違反である。

最後に、その四。

荷台の二人が僕を担ぎ込んでから「勇者の称号を持つものを漸く」だとか「しかしこんな少年が勇者とは」だとか言っているのだが、

勇者とはなんぞや？

言ってることの意味が分からない。

それから暫くの間も軽トラは走り続けた。背中に感じる振動は街中のものに変わっている。どうやらもう朝日町へと入ったらしい。逃げるなら今がチャンスか？大声で誘拐されました、助けて下さいとでも叫べば警察が助けてくれるんじゃないか？しかし助けられるまでにこいつらが僕に危害を加えないとも限らない。くそ、ほんとに何でこんな事になったんだ。

背中の振動が強まる。心臓の鼓動が早まるのを感じる。軽トラが止まったらしい。

ドアが開く音。前の二人が車から下りた。奴らのアジトにでも着いたのか？ああ、くそ、恐い。もう強がってもいられない。畜生ふざけんな。

「おや？」

荷台の外から男の訝しむ様な声がする。誘拐犯にしてはやけに優しい声だ。顔を上げてみれば先程助手席に移った僧侶風の男が僕を見下ろしていた。

「どうしたのかな？気分でも悪いのかね、少年。軽トラの荷台では流石に酔ってしまったかな」

「…………いえ、平気です」

しまった。思いのほか常識的なことを聞かれたので普通に返事を返してしまった。

「そうか、それなら良いんだ。安心したよ」

男の声からは、バイト先の店長が時折僕に向けるのと同じ、優しいさのような色があった。本当に僕の身を案じているようである。

この人は格好以外はまともそうだと思っっているとしたし男はこんな事を言いだす。

「生憎私は治癒系統のスキルは持っていないくてね。折角召喚した勇者の気分を害したともなれば我等が国王陛下から大目玉を喰ら

つてしまう」

……勇者の次はスキルに国王陛下かよ。いい年した大人が何を言ってるんだ。

「では少年、荷台から下りてきて貰えるかな。これから君を国王陛下の元に連れていかねばならない」 荷台に乗っていた二人

人が僕の体を支え立ち上がるようにうながす。力任せではなくそれこそ介護士でもあるかのような丁寧さだ。こいつらは不自然に僕を大切に扱っている。まあ誘拐したことを除けばの話だが。 「…

……あの、」

「うん、なになかな？」

「僕の両親は既に他界しており、今は親戚からの援助と日々のバイト代のみで僕は生活しています」

「そうか、それは気の毒に」

僕が言つと男は眉をしかめ本当にいたたまれない様な顔をする。余り同情されるのは好きじゃ無いが、今回はに限ればそんなことも言つてられない。

「なので僕を連れて来ても身代金などは決して手に入りません。僕にはそのような価値は無いのです。だからどうでしょう。このまま僕を解放してみても。今日のことはお互いに無かったこととしましょう」

やった。言い切れた。誘拐犯相手にここまでしっかり話せるとは。人間追い詰められると頑張れるものだ。

しかし僕の弁舌に僧侶風の男は何やら不思議そうな顔を浮かべるばかりだ。おい何だその反応は。

「申し訳無いのだが、君の言っていることが良く理解できない。君の言い方だとまるで私たちが君を誘拐したかのようなじゃないか」

「まさしくその通りでしょう。貴方達は誘拐犯で僕はその被害者だ」

「それは誤解だよ少年」 「何が誤解だと言うんですか」

「これは誘拐ではない。伝統に則った勇者召喚の儀だよ。我が

国では数十年前から行われている」

日本はそんな無法国家じゃねえよ、警察なめんな。 「しかし君が混乱するのもわかる。俗世は人間の魂に垢をつける。垢の付いた魂では物事を歪んだ形で捉えてしまうものだ。だが心配することとは無い。我等が国王に拝謁し、そしてアウラの洗礼を受ければ君の魂は浄化され真の輝きを取り戻すこととなるだろう。そしてその時、朝日キングダムは勇者を再び取り戻す」 ぞつとした。目の前の男を普通の人間だと思っていたさっきまでの僕は馬鹿だ。この男は本気で頭が別の世界に飛んで行ってる。言ってることの意味が分からない？こっちの台詞だ。

どうせNOとは言えないのでしょうか？

「さて、国王陛下を余りお待たせさせる訳にもいかない。サラマ
ンダー、カッシス。彼は自分で荷台から下りられないようだから、
手を貸してあげなさい」

僧侶の言葉に従い二人の男が僕の両脇に手を入れ軽々と荷台から
僕を下ろした。僕の体にはまるで負担は掛からない。ただけ力か
あるんだこいつら。

「ちなみに君の右に居るのがサラマンダーで左に居るのがカッシ
スだ」

「氷解せし炎の蜥蜴、サラマンダーだ」

「飛翔せし草羽の蜉蝣、カッシスです」

………なんだ今のは。自己紹介のつもりか？自分は頭がおかしい
ってことを伝えたいならこれ以上はないってくらい適切な自己紹介
だったが。偽名にしてもせめて日本的な、普通なものにして欲しい。
「二人とも貴重な二重属性持ちだ。我が国の兵の中でも精鋭の部
類に入るね」

最後になってしまったが、と僧侶は前置きを入れる。

「私の名はシューイン。隠れし鍊罪の賢者シューインだ。宜しく
勇者殿」

シューインと名乗った男は仰々しく僕に一礼をすると芝居がかつ
た動作で自分の真後ろにあった建物を手の平を向けて示す。

つられて示された方向に目を向ければそこにあつたのは絢爛にして華美なるお城があつた……なんてことはなく築十年くらいの地味な平屋があるだけだった。

「ここは？」

「王城さ。国王陛下とアウラは此処におられる」

「朝日町交流会館って看板に書いてありますが？」

「まあ建前上の名というの必要なのだよ」

ああそうですか。

しかし僕としては得体の知れない暗がりなんかに関連していかれるよりはマシな展開だと言える。シューインが何と言おうと此処はあくまで交流会館でありつまりは公共の場だ。気休め程度には気持ちも楽になる。

だがそんな公共の場に誘拐してきた高校生を連れ込むなんて一体どういふつもりなのだか。こいつらは、本気でこれが誘拐では無いなどと思っている節があるが、そんな屁理屈 国家権力たる警察には通用しない。勇者がどうだの言ってる間に手錠が両手を結んでいることだろう。

「では、行こうか」

サラマンダーとカッシスに伴われ、歩きだしたシューインの後を僕も追って行く。交流会館の引き戸を開けるがらがらという音が、今の状況の馬鹿馬鹿しさを笑っているようだった。

会館の中に入ると一斉に無数の視線が僕の方を向いた。

会館の中には十人以上の人間が居た。各々パイプイスに座っていたり、壁にもたれ掛かっていたりと纏まりが無いように見える。

老若男女もバラバラだ。

僕よりも幼く見える、中学生くらいの男子も居れば、明らかに還暦を迎えているような様なヨボヨボのおばあちゃんも居る。

だがそんな彼等もまた、シューインやサラムンダー達と同じ様にコスプレとしか言いようの無い格好をしている。成る程どうやら本当に此処はこいつらのアジトのようだ。余計なお世話になるかもしれないが、朝日町は大丈夫なのか？こんな連中が町民会館にたむろしているなんて、ろくなもんじゃない。

「ハイル・アサヒ！」

会館の中に居た連中に向けてであろう。シューインとその他二人が訳の分からないことを叫びながら、右手を胸の前に突き出す奇妙なポーズをとった。

いきなりすることに僕が驚きそしてドン引きしていると、会館の中に居た連中も「ハイル・アサヒ！」と叫び全く同じポーズをとった。

「皆さん、どうかお喜び下さい。我等の命運をかけた勇者召喚の儀は滞りなく成功致しました」

シューインは、まるで神の声を受けた神官かというような喜びに満ちた声でそう宣言する。

その宣言に対する反応はまちまちで、「おおおっ」と今にもひざ

まずき兼ねない様な反応をする者も居れば「ふん」といかにも馬鹿にするように鼻を鳴らす者も居る。

いいぞ、名も知らぬ若い男。そうだよ、こいつら馬鹿なんだよ。だからその見下す様な視線は僕にじゃなくてシューインとかに向けられ。

「私はこれから彼を国王陛下の下へと連れていきます。その際国王の御前にて彼の洗礼を行いますので、アウラを国王陛下のお部屋まで連れて来てください」

シューインが言うに伴い先程ひざまずかんばかりに感動していた中年男が忙しなく会館の奥へと走り去って行った。アウラとやらを連れて来るのだろ。もう何でもきやがれと自棄になった脳みそで考える。ここまで来たら行くところまで行ってやる。

その上で、何が何でも逃げ延びてやるのだ。

「それでは勇者殿、国王陛下のところまで案内するから、着いてきてくれるかい？」

「どうせNOとは言えないでしょう」

シューインが僕を、出来の良い教え子を見る様な目で見る。

勘違いするな。この状況を受け入れた訳じゃないぞ。ただ此処で逆らっても意味が無いってだけだ。

「それでは行きましょう。こちらです」

ああ着いていくとも。何でも来やがれ、畜生。

嫌です。(前書き)

早くも毎日の更新が難しくなってきました。

ああ、休みが欲しい。

嫌です。

「よお、ハジメマシテ 勇者クン」

シューインに国王だと紹介された男の第一印象は「普通」の一言だった。

歳は三十歳の半ばといった所だろう。 短く刈られた茶色に染まった髪と顎の髭が似合う中々格好の良い男だ。 高そうなスーツをだらし無く着崩しているのだが、この男だとそれすらも様になっっている。

何処からどう見ても普通の男だ。 しかしシューインが国王と呼び、そして僕を勇者と呼んでいるのだ。 この男も当然誘拐犯の仲間、そもそも首謀者であるのかも知れない。

「俺の名前は春日井 条助。 知ってるかはシラネエが、朝日町の町長をやってる」

知らなかった。 というか自分の町の町長の顔も知らないんだから隣の町長の顔なんぞ知っているはずがない。 しかし町長？

「陛下、貴方の名はアーサーです。それに、その格好は何ですか？ 俗世にかまけた格好をしていると民に示しが付きませんよ」
呆れたようにシューインが溜息をつく。

「生憎と俗世にもヤルことは沢山あるんだよ。 ああそれと俺の一張羅なら今修復中だ。 いつ戻って来るかはシラン」

「そうでしたか。洗礼が終わり次第勇者殿の装備も仕立てなければ為らないというのに、困ったものです。陛下、造剣部の件ですが、」

「あの、僕はこのまま放置ですか」

何やらこのまま二人で長話でも始めそうな雰囲気だったので、つい口を挟んでしまった。すると国王兼町長の方が一瞬キョトンとした後、何か面白いものでも見つけたような笑みを作った。何だというのだ。

「なんだよシューイン。今回の勇者は随分と落ち着きの有りそうな奴を選んだじゃネエか」

「勇者を選ぶのはこの世界の運命とでも呼ぶべき、上位存在です。私では有りませんよ」

「ハン。ま、それはどうでも良いこった。んで勇者クン、聞きてーんだけど、お前が、召喚、された理由ってのはシューインか誰かからもう聞いたか？」

国王兼町長が僕に視線を向ける。

「いいえ。何故僕が、誘拐、されたのか、その理由を僕は全く教えられていません」

「誘拐、ハッ。まあ、お前からすりゃ確かに俺らがしたのは誘拐だろうさ。しかし俺らにとってはチツと意味合いがちげえ。

よし、まずはそこから説明スツカ」

国王兼町長が懷からタバコを取り出し火を付けた。ん、今ライターを取り出してたか？

「お前、魔王を倒すため異世界に召喚された勇者の話、って
どこかで見たことネエか？」

そりや見たことはある。

「お前は正に、その召喚された勇者だよ。尤も、倒して
欲しいのは魔王じゃネエし、異世界よりや近めな隣町なんだけどな」

「は、何言ってるの」

いや、確かに勇者と呼ばれたし召喚だと言っていたが。

結局こいつもシューインとかと同じ類の妄想と現実の区別が
つかなくなった 頭の痛い奴ということか？ まともなのは格好だ
けってことかよ。

「いや、冗談じゃないぜ、マジマジ。俺の座る椅子を賭け
ても良い」

「パイプイスなんて要りませんよ」

「このパイプイス、王座って名前なんだぜ。なんせ王様が
座ってんだからな」

「陛下。話が脱線していますよ」

シューインが窘める。その疲れた顔を見るになかなかの苦労
症らしい。 良い気味である。

「つまりお前にゃ、勇者としてこの町の為敵と戦って欲しい

のさ。 どーよ、心踊る展開だろ。勿論答えは決まってるよな」

国王兼町長は自信満々の、世界は全部俺のものとも言わんばかりの顔をしている。

そんな目の前の男に僕が帰す言葉は当然、

「嫌です」

これ一択だ。

嘘だろ

「つか、嫌とか言う権利はお前には無い訳だ」

「何ですか」

「だってほら、誘拐犯なんダロ？俺らは」

くそ、ニヤニヤするな。結局脅してるじゃねえか。

「というか、何かの間違いなんじゃないですか？ 僕に勇者
足る要素なんて何一つ無いですよ」

何せ僕は押しも押されぬ普通の高校生なのである。 天涯孤独
で友達もほとんど居なければ恋人もないのだから普通以下と言っ
ても過言ではない。

「でもなあ、予言じゃお前だ、って出たんだよなあ」

「良い大人が予言とか信じてんじゃねーよ。頼みますからもう
家に帰して下さい」 これ以上は付き合って居られない。 バイ
トも遅刻は確定だが、今からなら行けば店長も許してくれるかもし
れないし。

「ホントに勇者じゃねーってんなら帰してやっても良いんだ
けどな。 ただの兵隊なら数は足りてるし」

「勇者じゃ無いです。 間違いない。 今までの僕の日常に
誓っても良い」

僕の言葉のナニカが琴線に触れたらしい。言葉の国王兼町長がタバコを握り潰し、僕を厳しい目で見据える。

「誓うと言ったな。この俺を前にして。その言葉に偽りは無い
か」

先程までは半分ふざけたような態度であつたのにも関わらず、今の国王兼町長はものを言わさぬ威圧感をその全身から放っている。その圧力に思わず「王」という言葉が頭に浮かんた。

その考えを目を閉じ打ち消す。こいつは頭のおかしい誘拐犯にすぎない。馬鹿な想像はするな。

「有りません」

「よからう。スキル“王権”による誓約。貴様が、勇者、で無かつた場合、我々は貴様を解放する。貴様が、勇者、であつた場合我々は貴様の日常を頂く」

厳かな口調で国王兼町長が告げる。最後まで言い切つた瞬間、僕と国王との中間点から一瞬光が溢れた。その光は複雑な幾何学模様の魔法陣となり僕と国王を囲うように拡がったかと思えば、そのまま光を失い解けていった。

「つな、嘘だろ……」

なんだ今のは？

僕の足元にあるのはただの床。光を発する昨日などあるはずが無い。それに今のは魔法陣か？ つまり、魔法？まさか、本物

の？

「嘘では無い」

国王ははっきりとそう言った。

「そう、国王陛下のスキル“王権”の前に嘘は有りません。王の御前での誓約は絶対遵守のものととなります。勇者殿は己の日常を対価に自由を求めた。結果がどちらになったとしても、先の誓約は確実に果たされることとなります」

シューインの言葉はただの音の羅列として僕の脳みその中に入ってきた。スポンジに水ずが徐々に染み渡る様に、その言葉の意味を理解していく。

もしかして、僕はとんでもない過ちを犯してしまったんじゃないか？ 絶対に差し出しちゃいけないものを差し出してしまったんじゃないか？

混乱する僕の後ろから一人の男が近づいて来る。

必要以上に慌てて振り向く。するとそこに居たのは先程も見ただけの中年男だった。

「陛下、賢者様。アウラ様をお連れしました」

そういうと中年男は両腕で抱えられる大きさの豪華な箱を国王と僕の中年に置いた。

なんだ、アウラ？ 人間だと思っていたが、箱？

さつきから続く思いがけない展開に頭が着いて行けない。

「丁度良いタイミングだ」

国王は最初の面白がるような表情に戻っている。 だが
それを、さっきまでと同じ様には見られなかった。

「これからオメーにはアウラの洗礼を受けて貰う。オメーが
本当に勇者なのかどうなのか、これではつきりするぜ」

「……………貴方がたの用意したもので判断するのは、不公平何
じゃ無いですか」

「心配しなくても勇者じゃねーのを勇者に仕立てあげるつもり
はネエさ。俺らが欲しいのはホンモノの、勇者、なんだからな」

国王が箱の蓋に手をかけ、そのまま箱を開いた。
箱の中にあつたものが僕の視界に入る。 意外なその物体に
またも僕は誰かに助けを求めたくなった。

「それに、アウラの審判は誰よりも公平だ」

箱の中にあつたアウラと呼ばれる存在は、市販されているのと
何も変わらない、ノートパソコンと同じ形をしていた。

こうして僕は勇者となった。

シューインが丁寧な手つきで箱からアウラと呼ばれたノートパソコンを取り出す。ノートパソコンの全体を見ても、普通の物との違いは解らない。また訳が解らなくなる。

「少しばかり待っていてくれたまえ。アウラの目覚めには僅かばかりの時間が要るのでね」

大仰なことを言いシューインはノートパソコンの電源ボタンを押した。

おい、ただパソコンを立ち上げるっただけじゃねえか。何が目覚めだ。

少し待たされた後、ノートパソコンは起動音を鳴らす。デスクトップにはアイコンが一つしかなく、背景は青地に白でエンブレムの描かれた国旗の様な物だ。よく見ればそれは朝日をモチーフにしている様であり、もしかしなくてもアサヒキングダムとやらの国旗である様だった。

「勇者殿、こちらに」

ノートパソコンは事務机の上に置かれている。その前に用意されたパイプイスに座るよう促される。

どんどんと逃げ場が無くなっていく様な錯覚が僕を苛む。それでも何故か用意されたパイプイスに、素直に座ってしまっていた。

シューインが横からノートパソコンを操作し唯一のアイコンをクリックする。

そのアイコンは名がアウラの審判となっていた。

パソコンの画面が切り替わる。いきなりブラックアウトしたかと思えば画面の外から白い糸の様なものが幾条も現れ、うごめきながらもそれらは文字の形に集い、文章を作り上げた。

【問1 貴方は神の存在を信じていますか？】

はい Y / いいえ N

なんだ、アンケート？ 何が始まるかと思えばただのアンケートだよ。ちよつと構えていたのに拍子抜けだ。 まあ、とにかく進める必要はあるのだろう。 こういう形で僕が勇者か否か量るというなら好都合だ。 勇者らしくない解答を選び続けられ良い。 取り合えずこの問いに対する答えはNOだ。

キーボードでNを打つ。

そのはずが僕の指はYを叩いており、問1に対してイエスと答えていた。

「は?。」

驚き自分の右手を凝視する。 自分の意志に反して動いた右手

が酷く不気味な物に思えた。

【問2 貴方は定められた運命に抗うことが可能だと思いますか？】

次の問が画面に紡がれる。 それを見て逡巡した末 キーボードを打つ。 Y。 またも僕が打とうとしたのと逆になった。

【問3 絶対的な正義がこの世界に在ると思いますか？】

Nを押す。 三度目にして初めて僕の指は僕の思い通りの所へいった。

【問4 世界から半分の間引きされるとして、自分が生き残る側になれると思いますか？】

考える。 試しにYを押そうとすると、僕の指はNを押す。

やっぱりだ。 どういう理屈かはさっぱりだが、 どうやらこのアンケート虚偽の答えは受け付けられないらしい。 本心と反対の答えを打とうとすれば指が勝手に本心の方の答えを打ってしまう。

これにしても、さっきの、王権、とやらにしても、得体が知れなさ過ぎる。 催眠術の類かとは思うが本当にそうかは不明だ。 魔法とか言い出されるくらいなら催眠術のほうがまだマシだが気味が悪いのには変わらない。

【問5 大切な人を守る為に、貴方は他人を害することが出来ますか？】

Y

【問13 晴れの日と雨の日なら晴れの日の方が好きである】

N

【問25 人を傷つけようと思った時は、口よりも先に手が出る】

N

【問58 夜 月を見上げた時、美しいと思う以上に昂揚を感じる】

Y

アウラからの問いは終わる気配が無い。意味の無いような問いから自分の本性を見せ付けられる様な問いまで、数限りなく投げ掛けて来る。問いの数が50を越えた辺りから半ば僕は自動的に成りつつあった。 どうせ指が勝手に本心を答えてくれるのだ。 気味は悪いが楽と言えば楽だ。

【問97 愛する人と全世界を天秤にかけた時、自分は愛する人を選択する】

N

【問98 死にたいと心の底から考えたことがある】

Y

【問99 人を殺したいと心の底から考えたことがある】

Y

問100を前にして問だけを紡いでいた画面の白い糸が、一つの文章をつくる。

【長らくお疲れ様でした。次の問にて私の審判は終了となります。最後の問いは二択ではなく口答にて行って頂きます】

最後の問い。その一文に緊張を覚える。今までの解答がどういう評価となっているにしても、この問いの後に僕がこいつらの求める勇者なのかそうでないのかはつきりしてしまうという訳だ。

【それでは問100です。嘘偽りの無い解答をお願いします】

黒い世界で白が絡み合う。最後に生まれたのは、
誰しもが一度は考えたことのあるような問いかけだった。

【貴方は、一体何のために生きているのですか？】

何のために。

何のために僕は生きているか。

問いに対する答えは、考えるよりも早く僕の口からこぼれ落ちた。

「死ぬため」

出た言葉に、一欠けらの嘘も無い。

「いつかこの命を遣い潰す為に、僕は生きている」

アウラは僕の答えを聞き届けた。最後に【有難うございました】と画面上に表れ、白い糸は画面中央を基点として渦を巻くように集っていく。

白い糸が完全に蕩けあい、一つの円となった。その円から文字が一つずつ吐き出され、100の問い掛けの結果が示される。

【結果発表

貴方の称号は第一を《歪なる》 第二を《創想の》
第三を《勇者》

《歪なる創想の勇者》

となります】

こうして僕は、勇者となった。残念ながら、望まぬながら。

勇者様。お目覚めになれましたか。

そこから先のことは記憶にない。

アウラにより《歪なる創想の勇者》なる称号を授けられた直後、僕の視界は暗転しその場に倒れ込んでしまった。

胃がまるごとひっくり返る様な不快感。重力の働く方向すら曖昧になっていく錯覚。

目が音を感じる。

肌が床の味を感じる。

口からだらし無く垂れた舌で、僕は僕を見下ろす国王とシューインを見ていた。

五感がぐちゃぐちゃに掻き混ぜられる。皮膚が指の先から剥がれ、裏返しに貼付けられていく様な激痛。

自分がばらばらになり、一つの肉塊になっていくのを感じる。今の僕はきつと人の形をしていなかった。

どれ程の間苦しんだらうか。

それは1分にも満たない時間だったかも知れないし、10時間以上も苦しんでいたかも知れない。

その痛みは僕が別の生き物に生まれ変わっていく痛みだった。

ただの高校生から、勇者という存在に作り替えられていく感触だった。

もつともそんなこと僕には解るはずも無い。にも関わらず僕がそのことを理解できたのは、激痛に支配された脳みそで何処からかの声を聞いたからだ。

その声は空を覆う雲の隙間から差し込む、一条の太陽の光に似ていた。

誰かの声は僕をヒュプノス、そう、ヒュプノスと、そう呼んでいた。

ヒュプノスの意識は地平線に囲まれた緑一色の草原で覚醒した。

未だぼんやりとしたままの頭で此処が知らない場所であることを理解する。そして、こういうのが勇者召喚のテンプレ何じゃ無いかとアホなことを考えた。

何も解らないままヒュプノスは地平線に向けて歩きだした。

此処は夢の中。ヒュプノスの兄弟の一人、夢の神オネイロイの世界であるとヒュプノスは気付いていた。

ヒュプノスは草原を歩く。草原に果ては見えず、草原以外の何物も見えては来ない。そのことに少しずつ不安が募っていった。

そんな折、ヒュプノスは何が丸いものが草原に落ちているのが見えた。近付いてそれが何なのか良く見てみれば、その丸いものは膝を抱えてうずくまった女の子であった。

いつもと違うベッドの感触に、目覚めた場所が自分の部屋では無いとヒュプノスは気付いた。

気分は悪くない。ヒュプノスはアウラの洗礼による苦痛を現実にくきた事としてきちんと認識している。

にも関わらず体には何の違和感も無い。まるであれが夢の中での出来事であつたかの様だった。

夢といえは変な夢を見たことを思い出す。果ての無い草原で歩き、そしてうずくまった女の子を見つけた。

見た夢の内容を一点の曇りも無く思い出せる。普通なら見た夢の内容なんて臆げでもっと曖昧な物のはずなのに。

不思議なこともあるものだヒュプノスは考え、それきりその事は

思考からはずす。どう考えても今気にするべき事は他にある。

周りを見渡す。六畳程の殺風景な部屋の中だ。ヒュプノスが寝ているベッドの他に、家具と言える物はがらがらの本棚と新品の様な光沢のあるクローゼットぐらいしか無い。

この部屋にはまるで新しい住人の為に慌てて設えた様な雰囲気がある。というか、本当にそうなのだろう。

此処は多分、僕の為に用意された部屋なのだ。

部屋にはドアと窓が一つずつあった。ヒュプノスは立ち上がり窓の方へと向かう。

閉められた白色のカーテンを開くと朝日が部屋の中に差し込んで来る。その眩しさに目が眩んだ。

そういえば朝日町は白夜町の東にあるのだった。つまり白夜町よりもほんの少し早く、朝日町には朝日が昇る。

「アサヒキングダム」

奴らは自分達の町をそう呼んだ。そして自分達には敵が居るとも。

そのための、勇者。

そのための、ヒュプノス。

もう気付いていない振りも出来ない。ヒュプノスを誘拐したあいつらはただ頭のおかしいだけの奴らじゃ無い。本当に、ヒュプノスの知る常識とは違う理の中で生きている連中なのだ。

アウラの洗礼による自分自身の改変が、嫌でもその事実をヒュプノスに突き付ける。

ヒュプノスは自分の内側に何か得体の知れない力が宿っている事に気付いていた。

そして昨日までの自分が、ヒュプノスという新しい自分の下に埋もれてしまっているという奇妙な浮遊感もある。

疑問はいくらでもある。

にも関わらず、ヒュプノスの心に恐怖は無い。

或いはアウラの洗礼によってヒュプノスの内面までも変わってしまったのだろうか？

一人でどれだけ考えを巡らせた所で答えは見つからない。

背後のドアが三度ノックされる。続けてドアの向こうから若い女の声がした。

「勇者様。お目覚めになりましたか？」

感情の感じられない、酷い言い方をすれば機械的な色の声だった。

「目覚めた」

ヒュプノスが返事を返す。すると「失礼します」と声かけられた後、ドアが静かに開かれた。

部屋に入って来たのは、女だった。少女だった。

今までヒュプノスが見てきたどの少女よりも美しい、美少女であった。

しかしその整いすぎた容姿は、声を聞いた時に抱いた機械的という印象を一層強くするものでしかなかった。

「貴方は誰だ？」

ヒュプノスの問いに、美少女もまた近い意味の質問を返して来た。

「私の名はアテネ。称号を持たない、ただのアテネです。貴方の名前は何ですか？貴方はアウラより、どの様に名付けられたのですか？」

アテネと名乗った美少女に尋ねられる。答えるべき名は、一つしかなかった。

「僕はヒュプノス。歪なる創想の勇者とかいう、ヒュプノス」

アテネはヒュプノスの答えに微笑みを浮かべる。

強張った笑みに、初めて彼女の中に人間らしさを感じた。

これです。(前書き)

遅れました。

ええ、遅れましたとも。

本当にね、はい、なんかもう、すいませんでした。

でも多分次は早く投稿できるはず。

きつと、恐らくは、願わくば。

いや、本当にすいません

これです。

ヒュプノスが寝ていたのは朝日町のとある一軒家の一室だったらしい。

アテネに伴われその家のリビングに連れてこられたヒュプノスは促されるままに座布団に座らせられアテネのいれたお茶を飲んでいる。おいおい、何を落ちて着いているんだ僕は。呑気にお茶なぞシバいてる場合か。

しかしアテネの煎れたこのお茶だが非常においしい。お茶になど詳しくないからこれが日本茶であることくらいしか解らないがこれ程までに美味しいとそれなりに興味がわく。

「このお茶、凄く美味しいです。貴方はお茶を煎れるのが上手いんですね」

「有難うございます。しかし私は特別上手いという訳では有りません。これは私が保有するスキルに因るものです」

スキル、王権、とかいうのもスキルと呼んでいたが。抱いた疑問を質問する。

「スキル、というのにはお茶を美味しく煎れる、なんてものが有るんですか？」

アテネは首を横に振り否定の意を示した。

「私の保有するスキルは、万能」。このスキルの所有者は特殊能力に頼らない事であれば総てを一級の技術で熟すことが出来ます」

「……………そりゃとんだチート能力だ」

ほとんど反則じゃないか。つまりその、万能、スキルがあれば一流のスポーツマンだろうと芸術家だろうと何にでも成れるということだ。

「そのスキルっていうのはどうやって身につけるものなんですか？」

単純な興味と、それ以上にアテネらの持つ常識を知っておきたいという気持ちからヒュプノスはアテネに問う。

「アテネの洗礼を受けた人間は例外無く何らかの称号を得ることが出来ます。そしてその称号に応じて与えられる特性、それがスキルです」

答えを聞き、ヒュプノスは自らの内側に感じる力について思い至る。

「つまり僕にもそのスキルっていうのが……………」

「取得しているはずです」

そうか、と呟きヒュプノスは意味も無く自分の胸に手をやる。有る、と一度意識してしまえばその力は一層ヒュプノスの内側で存在感をました。そのことによって、その力が複数有ることに気付く。

その数は、五つ。

「自分がどんなスキルを持っているか、調べることは出来ないんですか？」

「可能です。すぐにでも調べることが出来ますが、どうしますか？」

ヒュプノスは少しだけ躊躇うような様子を見せた後、一度だけ頷く。

それを確認したアテネは腰のポケットから片手で握れる程度の思い至る大きさのものを取り出す。

その物体が何なのかを認識したヒュプノスはまたか、とても言うように小さな溜息をつく。

「どうかしました？」

「いや、ファンタジーも近代化が進んでいるなと思ひまして」

アテネがその手に持っているのは折り畳み式の何の変哲も無い携帯電話だ。

ノートパソコンに始まり次は携帯電話。何ともそれっぽくない小道具ばかりが出てくる。

勇者だとか王様だとかファンタジーっぽい単語出してんだからそこから辺も徹底しろよと思う。

言及しなかったがアテネにしたってファンタジー風のコスプレじゃなく何処かの高校の制服を着ているし。

「近代化も何も、現代に住んでいるのだから文明の利器を使わない理由は無いでしょう」

「それもそうですか」

まあ、ヒュプノスも自動車使って誘拐されている。

今更と言えば今更だった。

「これです」

アテネが携帯の画面をヒュプノスに向けて見せる。

画面では携帯アプリ、《アウラの称号占い》なるものが起動していた。

これです。（後書き）

次の話で主人公の能力が判明します。

予め言わせて頂くと、主人公は最強と言えるレベルまで強くなります。

しかしあくまで、いずれ、なのでしばらくは大して強くはなりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154t/>

隣町で勇者してます。

2011年10月9日04時51分発行